

Sentire, Intellegere, Credere

—Augustinus, *Epist. 147, De videndo Deo. 1~iv. 11*—

水 落 健 治

序

1. アウグスティヌスが認識の問題について論ずるに際して、「感覚認識」*sentire*、「知性認識」*intellegere*、「信」*credere* という区分を採用したということは周知の所である。⁽¹⁾我々は以下、所謂『見神の書簡』*Epist. 147. 1~iv. 11* を採り上げ、そこに述べられている。‘*videre per oculos corporis*’, ‘*videre mente*’, ‘*credere*’ という三つの概念について若干の考察を加えることによって、*sentire*, *intellegere*, *credere* の概念とその相互関係の一端を明らかにしたい。

2. 『書簡147』(以下 *Epist. 147* と略記)は、『神を見ることについて』*De videndo Deo* と題され、A. D. 413年⁽²⁾ *Paulina* という女性に宛てられたものである。この413年という年は、周知の如く、ニカエア、コンスタンティノポリス、カルタゴの公会議が終り、エペソス、カルケドンの公会議を控えていた年であり、当時は、所謂「キリスト論」が頻りに議論されていた。東方では、キリストの人性を強調するアンティオキア学派(タルソスのディオドーロス、モプスエスティアのテオドーロス等)と、キリストの神性を強調するアレクサンドリア学派(アレクサンドリアのキュリロス等)とが対立していたし、西方では、テルトリアヌスに源を有するキリスト論⁽³⁾があった。そして、かかる問題関連において、キリストの見神 *visio Dei* の問題も議論されていた。即ち、「もし神が、ただ精神によってのみ見られるとするなら、受肉したキリストは如何にして神を見たのか。肉の眼によって神を見ることは可能だったのか」ということが問題とされ

ていたのである。こうした状況の中で、パウリーナは、アウグスティヌスに対し「眼に見えない神が肉の眼で見られるかどうかについて、何か十分に詳しく書いて欲しい」と依頼した⁽⁵⁾。そして、この依頼への返答として書かれたのが、*Epist.* 147である。

この書簡においてアウグスティヌスは、まず、神を見ることに言及した様々な聖書の箇所を引用する (n. 12~16)。そして、これらの一見相矛盾する箇所を整合的に理解するために、これらを整合的に理解した実例として、アムブロシウス『ルカ福音書講解』*Expositiones evangelii secundum Lucam* I, 24~27の本文を引用し (n. 18)、この本文に即し、これを註解するという仕方で論述を進めている (n. 19ff.)。従って、本書簡は、アムブロシウスのテキストの註解であると同時に、「神を見ること」についてのアウグスティヌス自身の聖書解釈の展開の書とも言えるのである。

そして、アウグスティヌスは、読者が、このいわば「本論」とも言うべき部分の記述に対し如何なる態度をとるべきかを示すために、その冒頭に「序論」を置き、そこにおいて、聖書の解釈の基本的原理についての考察を展開した (n. 1~11)。即ち、我々の「知」*scientia* が、(1)感覚認識 *videre per oculos corporis* に由来するもの、(2)精神による認識 *videre mente* に由来するもの、(3)信 *credere* に由来するもの、の三者より成り立っていることを示し、以下の「本論」における聖書解釈の議論の結果明らかになる「知」の内容が、これらの何れに属するかを明らかにすることによって、以下の議論に対し読者が如何なる態度をとるべきかを示そうとしたのである⁽⁶⁾。この「序論」の部分が、今回我々の取り扱おうとするテキストである⁽⁷⁾。

【補註】 所で、本書簡執筆の前年に始まったペラキウス論争は、聖書解釈についての反省的考察を、アウグスティヌスに促した (*De Doctr. Christ.* III. xxxiii. 46)。従って、本書簡の思想は、この論争を契機に深められたものかも知れない。

I **videre per oculos corporis, videre mente, credere** の探求

— 実例による説明

3. アウグスティヌスは、(1) *videre per oculos corporis*, (2) *videre mente*, (3) *credere* についての探求を、まず実例を挙げることから始める。

第1に、我々が「肉の眼で見る」*videre per oculos corporis* のは、次のような場合である：太陽等の天体 *corpora caelestia*, ないし、山や木等の地上の物体 *corpora terrestria* を肉の眼で見る場合⁽⁸⁾。また、色・音・香・味・熱等を、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚を介して感覚する場合、ないし、感覚したことを想起する場合⁽⁹⁾。要するに、これは、如何なるものであれ「物的なもの」*res corporalis* を五官を介して感覚する *sentire* 場合である。

(ここで、五官の1つにしか過ぎない視覚を示す「見る」*videre* という語が、他の感覚器官の場合をも含めたこの場合の標題として用いられているのは、この語が、例えば味覚について「何の味がするのを見なさい」と言われる場合の如く、他の4つの感覚器官の場合にも用いられるからである⁽¹⁰⁾。)この場合、見られる対象は、見る人の外に、空間 *intervallum loci* を隔てて在り、人は五官を介して以外それらの対象を見ることはできない。⁽¹¹⁾

第2に、「精神において見る」*videre mente* と言われるのは、次のような場合である：自らが生きていることを見る場合、自らが何かを意志していることを見る場合、自らが何かを探求していることを見る場合、自らが生き、意志し、探求していることを自らが知っているということを見る場合、自らが何かを知らないということを見る場合⁽¹²⁾、そして更に、自らの思惟 *cogitatio*, 記憶 *memoria*, 知性認識 *intellegentia*, 信 *fides* を見る場合⁽¹³⁾も、この認識に数えられている。我々は、これらの事例から、ここに *videre mente* と呼ばれている認識が、アウグスティヌスが他の箇所「知性認識」*intellegere* と呼ぶものであることを知る事ができるが、ここで特に注目しておきたいのは、これらの事例がすべて「自己認識」に関わるものだという事である。つまり、アウグスティヌスは、「知性認識」なる

ものを、いわば「自己認識をモデルとして」考えていたのであり、自己の魂の内に起こる様々なことがらを認識する際の認識の性格が、*intellegere* (つまり *videre mente*) の性格を構成するとされているのである。我々は、自己の生や意志、思惟や記憶（これらは「可知的なもの」*res intellegibilis* と総称できよう）を見る時、対象を、空間を隔てて自己の外にはなく、むしろ自己の内において見る。また我々は、これらの対象を、極めて単純な仕方でも *simpliciter* 見るが、その対象について疑いを差挟むことは不可能であり、我々は、それらを却って、極めて明晰なるもの、極めて確実なるものとして見るのである。要するに、認識の内面性、単純性、確実性が、*videre mente* (つまり *intellegere*) の特徴である。

第3に、「信」*credere* の実例としては次のものが挙げられている：アダムが最初の人間であり両親なしに創造されたことを信ずる場合、キリストの処女降誕・受難・復活を信ずる場合、また、一度も訪れたことのない国の存在を信ずる場合、ローマがロムルスによって建国されたことを信ずる場合、両親が我々を産んだことを信ずる場合などである。我々はこの類いのことを多く知っている。しかし、我々はこれらのことを、自ら五官によって感覚したのでも、精神において見たのでもない。むしろ、我々はこれらのことを、「聖書や他の証人が語ることであるから、そうに違いない」と考えることによって知ったのである。要するに、「信」とは、時間的・空間的に我々から離れているもの *absentia* を、聖書ないし他の証人の權威 *auctoritas* の故に承認することである。(この、*credere* の対象たる *absentia* に対して、*videre per oculos corporis*, *videre mente* の対象は、我々に現存するもの *praesentia* と呼ばれる)

4. 以上の実例から、我々は、(1) *videre per oculos corporis*, (2) *videre mente*, (3) *credere* という区分が、(1) 感覚認識 *sentire*, (2) 知性認識 *intellegere*, (3) 信 *credere* という区分に相当することを知らることができると共に、それぞれの認識の若干の性格をも知る事ができるであろう。今、それら

を表示すれば次のようになる：

	videre		credere
	per oculos corporis (sentire)	mente (intellegere)	
対象の性格	praesentia		absentia
	res corporalis	res intellegibilis	
対象の在る場	自己の外	自己の内	自己の外
認識が生起する 場・媒介	五 官	精 神	auctoritas (聖書, 他の証人)
認識の性格	単 純 性・確 実 性 の 度 合 が 低 い	単 純 性・確 実 性 の 度 合 が 高 い	

Ⅱ 反論——sentire intellegere, credere に関わる三つの問題

5. 次にアウグスティヌスは, videre per oculos corporis, videre mente, credereについての探求を一層深め, 三者の概念を一層明確にするために, 「或る人々」の唱える異論を採り上げる (n. 6)。

或ることがらを真と信ずる時に我々が「信ずる」と語ること——これのみが「精神において見つめること」mente contueri である。……なぜなら, これら信の対象は, 正に物的に起こったのであり, もし我々がその場に居合わせたなら, 確かに肉体を介して見る事が可能であったが, しかし今は, 「肉眼が識別する光」が現存するような仕方においても, 「精神が洞察する意志」つまり「我々が意志する時の意志」が現存する(20)ような仕方においても, それらは現存していないのだからである。

この異論は幾分わかりにくい, その言わんとする所は, 次のように要約されるであろう。

(1) 信の対象は, すべて res corporalis である。従って, それが起こった時その場に居合わせたなら, 我々はそれを五官で見れた筈である。

(2)物物的に起こったことがらが信の対象となるのは、それが過去に起こったからである。

(3)所で、既にあることがらを信ずる働きは、精神 mens の働きに他ならない。

(4)従って、videre per oculos corporis, videre mente, credere という区分は誤っている。credere は、むしろ videre mente に含ませるべきである。

6. この説を主張した「或る人々」nonnulli が如何なる人々であったのかは、我々には分らない。しかし、この説が「信仰」についての或る意味での近代的な解釈を述べているということは、疑い得ぬ所であろう。即ち、この異論は、「信」credere という語によって、特に「聖書に述べられている様々なことがらに対する信仰」を念頭に置き、救済において信仰の果す役割を重視する余り、「信」を videre mente(intelligere) に引きつけて考⁽²¹⁾えていると思われるからである。

しかし反面、この異論は、我々に、考察すべき様々な問題を提起している。それらは、差しあたり、以下の三点に集約できよう。

〔問題1〕信の対象と、res corporalis—res intelligibilis の区分との関係の問題。異論は、信の対象を res corporalis と限定している。かかる考え方が出て来るのは、「信」という語によって「聖書に対する信仰」が念頭に置かれており、また、聖書に「信じられるべきこと」として述べられていることがらの多くが res corporalis に関わることであることからすれば、むしろ当然のことであろう。しかし、果して「信の対象のすべてが res corporalis であり、res intelligibilis は信の対象にはならない」と言えるであろうか。

〔問題2〕信の対象と、そのことがらが起こる時間との関係の問題。異論は、「或ることがらが信の対象となるのは、それが過去に起こったことだからだ」と述べている。しかし、「信の対象のすべてが過去に起こったことであり、現在起こりつつあることがら、未来に起こるだろうことがら

は、信の対象とはならない」と言えるであろうか。

〔問題3〕 credere と videre mente (intellegere) との関係の問題。異論は、credere を videre mente に含ませるべきだと考えた。しかし、両者は同一であると言えるだろうか。もし言えないとすれば、如何なる点で両者は異なるのか。credere においては、精神 mens は全く関与しないのか。⁽²²⁾

これらの問題に対し解答を与えることは、先に述べられた様々な実例(第3節)だけでは不十分である。アウグスティヌスはこう述べている：しかし、以上の区分が偽ではないということについて、先の序言は僅かしか述べなかった。なぜなら、「信」と「何か現存するものを精神において見ること」とが全く同一であると看做されることがないようにするためには、両者が明瞭なことばで区別されなければならないが、その区別が不十分な仕方ではかなされてい⁽²³⁾なかつたからである。

Ⅲ credere の概念の探求 (1)——credere の対象について

7. そこでアウグスティヌスは、n. 7 以下で、videre per oculos corporis, videre mente, credere について更に深い考察を試みる。彼はこの探求を、「videreの対象は、五官ないし精神に現存するもの praesentia であるが、credereの対象は、五官からも精神からも離れているもの absentia である」という命題 (cf. 第4節) の吟味から、つまり、videre と credere の対象の吟味から始める。そこでまず、credere の場合から見てゆこう。

「信 credere の対象は、五官からも精神からも離れているもの absentia である」という命題は、確かに「信」の対象の性格を規定している。しかし、この命題は、前節で提起された三つの問題の内、信の対象に関わる最初の二つの問題に答えることができない。そこでアウグスティヌスは、この点を明らかにするために、一つの例を考える。

例えば、誰かが、私に面と向かって、「自分は今これこれを行おうと思っている」と語って、自らの意志 voluntas を示す場合のことを考えてみよ

う。この場合、相手の口と声とは私の五官（視覚と聴覚）に現存する——つまり *praesentia* である——。然るに、相手の意志それ自体は、私の五官にも精神にも現存してはおらず——つまり *absentia* であり——、従って、私は、相手の意志の存在を「見て」いるのではなく、むしろ「信じて」いる。⁽²⁵⁾

この例より、我々は、信の対象の性格について、更に明確な規定を得ることができる。第1に、信の対象は、必ずしも *res corporalis* であるとは言えない。この実例における相手は、自らの意志 *voluntas* を見ているが、既に述べられた所からして（第3節）、彼らが自らの意志を見ているのは精神 *mens* においてであり、その限りで、この場合「信」の対象となっているのは *res intellegibilis* なのだからである。それ故、我々は、前節の〔問題1〕に関しては、次のように答えることができる：*res corporalis* も *res intellegibilis* も共に信の対象となり得る。

第2に、信の対象は、必ずしも過去のこととは限らない。他人の意志の存在を信ずる場合、「何かを行おう」とする意志は過去のものではなく、その人の内に現在存在しているのだからである。また、未来に起こるだろうことがらが信の対象となり得るか否かについては、この実例からは明らかではないが、終末（つまり、未来）に起こる「見神」*visio Dei* が信の対象とされていることからして、未来のことがらもまた、信の対象となり得ることは明らかであろう。従って、〔問題2〕に対しては、こう答えることができる：過去に起こったことがらも、現在起こりつつあることがらも、未来に起こるだろうことがらも、信の対象となり得る。

IV *credere* の概念の探求(2)——*credere* における判断

8. 所で、前節で挙げられた実例において、我々は、相手が自らの意志について語るすべての場合に、相手の意志の存在を信ずるのではない。相手が偽っていると我々が判断する *existimare* の場合には、たまたま相手

の言葉が真で、相手の内に実際に意志が存していても、我々は信じはしないのである。⁽²⁷⁾だから、信の対象はすべて *absentia* であるが、逆に、すべての *absentia* が信じられるのではない。我々の五官や精神から離れているもの *absentia* が信じられるためには、信ずる人の側における何らかの「判断」が必要なのである。

9. ではこの判断 *existimare* は如何なるものであろうか。このことを明らかにするために、我々は、或ることがらが信じられるに至るためには如何なる過程を経るのかということをはっきりと明らかにしなければならない。

五官においても精神においても見たことがないもの *absentia* を私が信ずるためには、誰かそのことがらを自ら見て、それを私に語る人が存在しなければならない。アウグスティヌスは、その語る人を「証人」*testis*、証人の語る内容を「証言」*testimonium* と呼ぶ。⁽²⁸⁾証人が証言を語る時、その証言は、声 *vox* や文字 *littera* という「標」*signa* の形態において私のもとにもたらされる。⁽²⁹⁾私はまず、五官を通してこれらの音声や文字を「感覚」*sentire* する。次に私は、自らの内で、それら感覚された標と対応関係にある「もの」*res* を記憶 *memoria* の内から「想起」*commemorare* し、それらの「もの」を「標」の文法的構造に従って組み合わせて、証言の意味内容を「理解」*intellegere* する。⁽³⁰⁾然る後に、私は、私とその内容を理解した証言が証言として正しいものであるか否かの「判断」*existimare*、即ち、その証言内容の真偽の判断を行う。そして、その内容が「その通りである」*ita est* と判断された時初めて、私は、その証言内容を「信ずる」*credere* のである。⁽³¹⁾

従って、*credere* における判断とは、「証言の内容が理解された後に行われる、その内容の真偽についての判断」であることが分る。

10. この判断が具体的場面で如何なる仕方で行われるのかということは、アウグスティヌスが述べている次のような実例 (n. 11) によって明らかになる。

或る人が「自分は今これこれのことについて信じている」と私に語り、私が「この人の内には信 fides がある」と信ずる場合を考えてみよう。この場合、相手の内における信の存在を私が信ずるためには、私は、相手の証言の意味を理解し、その内容を「その通りだ」と判断しなければならないが、その判断は次のような仕方で行われる：

- (1) videre mente の対象である「信」を「五官」によって見ることは、相手自身にとっても不可能である。従って、sentire の対象でない「信」を、私が五官によって見ることはできない。
- (2) 私が精神において自らの信を見ている場合でも、他人は私の信を見えない。(その証拠に、私は「信じていない」と偽りの証言を語って、他人を欺くことができる。)従って、相手の内に信がある場合でも、私は精神によって相手の信を見ることはできない筈だ。
- (3) 故に、私は相手の信を、五官によっても精神によっても、見ることはできない。
- (4) だから、「私は信じている」という相手の証言は、真である可能性がある。だから私は、この証言を真であると看做⁽³²⁾そう。

相手の内の「信」の存在を私が信ずる場合の判断 existimare についてのこの記述は、「信」以外のもの、例えば「意志」、「思惟」等の相手の内における存在を私が信ずる場合にも妥当するであろう。事実アウグスティヌスは、パウロが「人の内において何がなされているのかを知るのは、その人の内にある霊 spiritus 以外にはない」(I Cor. 2, 11)と語り得た背後には、上と同様の判断の過程があったと述べ、上の判断の過程を、魂の内⁽³³⁾に起こる「信以外のことがら」にも拡張しているのである。

11. しかしながら、かかる判断は、極めて不確実なものである。なぜなら、この判断は、「信」や「意志」等の相手の内における存在の可能性を示すのみであって、それらが相手の内に実際に存在するか否かについては何の保証も与えないのだからである。では、この不確実性は何処に起因す

るのであろうか。

credere における判断の不確実性は、credere の対象が、私の五官からも精神からも離れているもの absentia であるということに起因する。即ち、credere の対象は absentia であるから、私は、その証言内容の真偽の判断を行うに際し、自らの五官や精神においてことがら自体を直接見、自ら見たことがらとその証言内容とを「比較する」ことによって、証言の真偽の程を確かめることはできない。つまり、credere における判断は、「間接的判断」たらざるを得ないのである。

従って、「信」credere の対象は悉く absentia なのであるから、信における判断の不確実な性格は、単に、今我々が引き合いに出した「他人の魂の内に起こることがら」の場合のみでなく、「信」すべての場合に妥当することが分るのであろう。およそ、「信」による認識は、それ自体としては不確実なものなのである。

V videre の概念の探求——videre の2つのモメント

12. 以上我々は、「credere の対象は absentia である」という命題の吟味を手掛りとして、credere の対象と、credere における判断とについて考察して来たが、以上をもって、credere の概念が若干明らかになったであろう。そこで我々は、次に、videre の場合に考察を移すことにしよう。credere の場合と同様に、videre の考察も、videre の対象の考察から始まる (cf. 第7節)。

さて、「videre の対象は、五官ないし精神に現存するもの praesentia である」という命題が成立することは、自明であり、格別論を俟たないように思われる。五官ないし精神に現存しないものが見られるということはありませんし、五官ないし精神に現存するものはすべて見られるのだからである。

13. しかしながら、ここで一つの問題が起こる。それは、「我々が過去

に *videre* したことがら」の場合である。

「我々が過去に *videre* したことがら」は、それが五官によったのであれ精神によったのであれ、現在我々の五官や精神に現存していない限りにおいて、我々から離れている——つまり、*absentia* である。然らば、それは「信」*credere* の対象に数えられるべきであろうか。アウグスティヌスは、それはむしろ *videre* の対象に数えられるべきである⁽³⁴⁾と言う。

しかしながら、「過去に *videre* したもの」のすべてが、*videre* の対象と看做されるのではない。それが *videre* の対象と看做されるためには、二つの条件がある。

第1の条件は、過去に *videre* した内容を、*videre* した人が現在記憶しているということである。人が或ることがらを見ても、現在その内容を忘れてしまっていては何もならない。彼はその内容について語ることすらできなくなるであろう。

しかしながら、この条件のみでは、過去に見られたことがらが *videre* の対象と看做されるためには不十分である。例えば、我々が自ら訪れたことのない町についての話を誰か他の人から聞き、その内容を信じた場合について考えてみよう。この場合、私は自分でその町を見たわけではないから、私が獲得した知識は、「信」によるものである。けれども、それから長い時間が経過した後、その町のイメージは記憶していても、私とその町を実際に訪れたか否かが曖昧になってしまい、自ら訪れたことのない町を、「訪れた」と錯覚してしまうことがある。また反対に、自ら訪れた町の記憶を、他人から聞いた町についての記憶であると錯覚してしまうこともある。では、このような「錯覚」はどうして起こるのであろうか。それは、我々が、過去に *videre* したり *credere* した「内容」についての記憶のみを現在保持していて、もう種類の記憶を保持していないからである。即ち、「自分が *videre* したことの記憶」、「自分が *credere* したことの記憶」⁽³⁵⁾を保持していないからなのである。何かを見たり信じたりする時、我々

は、その内容を見、また信じるのみではない。我々は同時に「今自分はこれこれを見ている、信じている」ということをも見ている。⁽³⁶⁾そして、この「自分の *videre* や *credere* についての *videre*」が記憶に貯えられていて、*videre* や *credere* の内容が想起される時同時に自己に関わるこれらの記憶が想起されることによって初めて、我々は、過去に *videre* したり *credere* した内容を、*videre* の対象、*credere* の対象として正しく想起できるのである。従って、過去に *videre* したことがらが、現在 *videre* の対象として正しく想起されるためには、*videre* した「内容」の記憶に加えて、「自分がその内容を *videre* した事」についての記憶も同時に必要である。これが、過去に *videre* されたことがらが *videre* の対象と看做されるための条件の第2である。⁽³⁷⁾

14. このように考えて来ると、「自らが *videre* していること」の *videre* は、単に「過去に *videre* されたもの」が現在 *videre* の対象と看做されるためばかりではなく、「現在 *videre* されているもの」が *videre* の対象と看做されるためにも必要であることが分るのであろう。即ち、現在私が或ることながら *videre* している場合、私は同時に「私は今 *videre* している」ということをも *videre* しているが、この第2の *videre* がなかったら、私は、現実に何かを見ているのか、夢を見ているのか、幻を見ているかの区別がつかなくなってしまう、現在見ている内容の確実性をも疑わざるを得なくなるだろうからである。

Ⅶ *credere* の概念の探求 (3)——証言の2つのモメント

15. こういうわけで、「自分が何かを *videre* していること」の *videre*、そして「自分が何かを *videre* していること」の *videre* の記憶は、*videre* の内容の確実性を保証しているが、その限りにおいて、この「*videre* の *videre*」は、*credere* の場合と対応している。即ち、*credere* の場合、証人 *testis* は自ら *videre* したことがらについての証言 *testimonium* を語るが、そ

の証言は、ただことがらの内容を述べるだけでは証言にならない。証言には同時に、「この証言の内容は、私（証人）の見たことであるから確実である」との主張が——たとえ明確に言葉に出されていなくても——伴っていなければならないのである。つまり、証言が証言たり得るためには、(1)「証言の内容の主張」と共に、(2)「その証言内容を証人が *videre* したことの主張」が伴っていないなければならないのである。従って、証言のこの第2のモメントは、証言内容の確実性を保証している限りにおいて、*videre* の場合における「自己が *videre* していることの *videre*」に対応している。アウグスティヌスが、n.8 冒頭で述べている

しかし、我々がかつて見たり現在見ていることがらにおいては、我々自身が証人である。

という言葉は、その裏にかかる事態を含意しているのである。

16. それ故、我々が既に論じた「信 *credere* における判断の不確実性」（第11節）は、正にこの点に関わっている。或ることがらが「信」という仕方で我々のもとにもたらされた時、そのことがらが、*videre* という仕方でもたらされた場合と同等の確実性を持ち得ないのは、*videre* の場合には、(1)認識される内容と、(2)その内容の確実性を保証する「*videre* の *videre*」との双方が認識者のもとに在るのに対して、*credere* の場合には、ただ認識される内容のみが認識者のもとにもたらされ、その内容の確実性を保証する「*videre* の *videre*」が他者の内に存するという認識構造の相違に起因しているのである。⁽³⁸⁾

Ⅶ 「知」 *scientia*

17. こういうわけで、およそ我々の認識することがらは、「可感的なもの」*res sensibilis* か「可知的なもの」*res intellegibilis* かの何れかであるが、それらは、過去のことがらであれ、現在のことがらであれ、或いは未来のことがらであれ、三つの仕方で認識される。第1に、可感的なものが認識

者に現存する場合（つまり *praesentia* の場合）、それは、五官を通して認識される。これが *videre per oculos corporis* による認識、つまり感覚認識 *sentire* である。第2に、可知的なものが認識者に現存する場合、それは、精神によって認識される。この認識が *videre mente*、つまり知性認識 *intellegere* である。そして第3に、可感的なものであれ可知的なものであれ、認識対象が認識者から離れている場合（つまり *absentia* の場合）、それは誰か他者の証言 *testimonium*、つまり、言語を媒介として認識される。これが、信 *credere* による認識である。

これら三様の仕方で認識されたことがらは、それぞれ、認識過程を異にし、また認識の性格や確実性をも異にしながらも、混然一体となって我々の記憶 *memoria* の内に貯えられている。かかる状態が、我々の「知」*scientia* の状態であり、かかる仕方で認識されたことがらが、我々の知の内容を成しているのである。

それ故、我々の知は、見られたことがらと、信じられたことがらから成り立っている。⁽³⁹⁾

VIII 精神 *mens* の役割

18. それでは、かかる我々の知において、「精神」*mens* は一体如何なる役割を果しているのだろうか。

さて、先に提起された異論（第5節）の主張する所は、「或ることがらを真と信ずる時に我々が『信ずる』と語るとは、『精神において見つめること』に他ならない」ということであつた。⁽⁴⁰⁾ アウグスティヌスは、この異論の主張を、「或る観点において正しい」と認める。即ち、「信」*credere* においても何らかの仕方で精神 *mens* が関与している ということ を認める⁽⁴¹⁾のである。

19. では、その仕方とは如何なるものであろうか。アウグスティヌスは、そのことを説明して、次のように述べている；

なぜなら、「知」scientia というものは、肉体の感覚によって知覚され認識された何かを保持する場合であれ、魂 animus 自体によって知覚され認識された何かを保持する場合であれ、精神 mens に帰せられ tribui、また、信によって信じられるものは見られないとしても、少なくともその「信」fides それ自体は精神 mens において見られるのだからである⁽⁴²⁾。この言葉は、認識における「精神」mens の役割について語っているが、その正確な意味は理解困難である。そこで我々は、以下このテキストの解釈について考えてみよう。

まず、テキスト冒頭の「知」scientia という語が、‘videre per oculos corporis’の場合と‘videre mente’とによって獲得された知、つまり、「見られたことがら」res visa についての知を示していることは明らかである。この「知」という語につけ加えられている二つの規定の内の後者、つまり「魂自体によって……」という語は、明らかに、videre mente の場合を指しているのだからである⁽⁴³⁾。

従って、このテキストは、videre, credere それぞれの場合に精神が関与していることを述べている。そして、videre の場合の関与の仕方が「知というものは、精神に帰せられる」scientia menti tribuitur という語で、また credere の場合の関与の仕方が「信それ自体は精神において見られる」fides ipsa mente videtur という語で、それぞれ示されているのである。

「信それ自体は精神において見られる」という語は、「信じられる対象（内容）が精神において見られる」という意味ではあり得ない。我々が「信」について考察した所から明らかなように（第3節）、信の対象は absentia であるが、或ることがらが精神において見られた時には、それはもはや absentia ではなく、むしろ praesentia なのであり、従って、それは、「信じられる」のではなく、むしろ「精神において見られている」のだからである。ではこの語は如何に解されるべきだろうか。ここで我々は一つの注目すべき事実に目を留めようと思う。アウグスティヌスは、videre per

oculos corporis, videre mente, credere の区分について論ずるにあたって、まずそれらの実例を示し、「信」fides の場合についてもそれを videre mente の対象と看做したが（第3節）、そこで彼は videre mente の内容について興味深い言い換えを行っている。今それを表にして示せば、次のようになる：

(1) videre mente	(2) videre mente	(3) videre mente
se viventem	quod vivas	vitam tuam
se volentem	quod (videre Deum) velis	voluntatem
se scientem	quod te $\left\{ \begin{array}{l} \text{videre} \\ \text{velle} \\ \text{quaerere} \end{array} \right\}$ scias	scientiam
	quod $\left\{ \begin{array}{l} \text{quomodo} \\ \text{Deus} \\ \text{videatur} \end{array} \right\}$ nescias	ignorantiam

これらの語は、すべて‘videre mente’の目的語として n. 3 に挙げられているものであり、(1)欄、(2)欄、(3)欄は、それぞれ横に対応し、例えば、‘videre mente se viventem’は‘videre mente quod vivas’、‘videre mente vitam tuam’と言い換えられていることを示している。ここで注目すべきことは、「生」vita、「意志」voluntas、「知」scientia 等の《抽象名詞》が、「生きていることを」、「意志していることを」、「知っていることを」等の《動作・状態を示す名詞節》で言い換えられていることである。従って、その直後の箇所（n. 4）で、「精神において信を見る」videre mente fidem と言われる時、我々は、その語の意味を、「自分が何かを信じているということを精神において見る」と理解できるのである。以上のことから、今我々の問題としているテキストの「信それ自体は精神において見られる」という語（n. 8）も同様に理解されることが分るのであろう。即ち、精神 mens は、「『自分はこれこれのことがらを信じている』ということを見る」という

仕方で、「信」*credere* に関与しているのである。

従って、*credere* の場合との対比において、*videre* の場合の精神の関与の仕方について述べた「知というものは精神に帰せられる」という語についても、我々は同様に理解できる。即ち、精神 *mens* は、*videre* の場合、「『自分はこれこれのことを知っている』ということを見る」という仕方では *videre* に関与しているのである。我々は、五官や精神によって、個々の認識対象を認識し、それを記憶の内に貯えるが、我々は、この過程において、同時に、自らが感覚認識していること、知性認識していることをも認識し、それらが、感覚や精神によって認識され現在記憶の内にあること（つまり「自らが知っていること」）をも認識する。そして、かかる「自己認識」が、「精神」*mens* によって行われるのである。

20. 従って、「精神」*mens* は、*credere* の場合には、「自らが何かを信じていることを見る」という仕方において、また *videre* の場合には「自らが (*sentire* ないし *intellegere* によって) 何かを知っていることを見る」という仕方において、*credere*, *videre* 何れの場合にも関与しており、その限りでは、先の異論の主張も正しいことになる。(第6節で提起された〔問題3〕に対する解答は、ここに至って明らかになる。)

21. では、かかる仕方での精神の働きは、我々の認識において如何なる役割を果しているのだろうか。しかし、この問題に対する解答は、我々が先に行った「*videre* の *videre*」についての考察(第13～14節)を想起すれば、もはや明らかであろう。我々は先に、或ることがらが *videre*, *credere* される時に、それが正しく *videre*, *credere* の対象と看做されるためには、同時に「自らがその対象を *videre*, *credere* していること」の *videre* が必要であると論じたが(第13～14節)、この「*videre* の *videre*」, 「*credere* の *videre*」が、他ならぬ精神 *mens* に帰せられるのだからである(第3節, 第20節)。精神は、個々の認識の場面において、自己が、*sentire*, *intellegere*, *credere* の内の何れの仕方でも認識を行っているのかを見る。そして、そのことによ

て、認識された個々のことがらを、sentire に由来するもの、intellegere に由来するもの、credere に由来するものへと、整理・区分するものである。

22. しかしながら、精神の働きは、これだけに留まらない。既に述べられた如く（第3節）、精神は「我々が—— sentire, intellegere, credere によって——何かを知っている」ということを見るのみでなく、同時に、「我々が知らない」ということをも見る。だから、精神は、我々の認識において、単に認識内容の整理・区分を行うだけでなく、認識されていることがらと認識されていないことがらとの整理・区分を行うのである。

23. それ故、精神 (mens) は、我々の認識において、三重の役割を果たしている。第1に、それは、sentire, credere と並ぶ我々の認識能力の1つとして、自らに固有な対象を認識する。第2に、精神は、自らが sentire, intellegere, credere していることを見、そのことによって、認識された内容を整理・区分している。そして第3に、精神は、自らの知と無知とを認識し、自ら知っている内容と知らない内容とを相互に区分しているのである⁽⁴⁴⁾。このように、精神 mens は、我々の認識能力の1つでありながら、我々の認識の様々な段階の全体に浸透し、認識された内容に秩序を与え、認識の确实性の度合いに応じて区分し、それらを統轄している⁽⁴⁵⁾のであり、その限りで、これは、認識能力の一つではあるが、同時に、≪認識能力を超えるもの≫なのである。

結 論

24. 以上の考察によって、sentire, intellegere, credere の概念と、これらの認識において精神 mens の果す主導的役割とが、若干明らかになったであろう。精神は、それ自体認識能力の1つでありながら、我々の認識の全体に浸透し、それを統轄しているという意味で、それ自体、認識能力を≪超えて≫いる。それはむしろ、自己の一部でありながら、何か自己を超えた存在に向かって開かれたものなのである。だから、この精神が、自己

を超え、神に向かって開かれ、次第に高められて行く時、我々の認識は、自己を超え、神の認識へと次第に高められて行き、遂には「見神」 visio Dei の段階に至るであろう。そして、この問題についての考察こそが、この『見神の書簡』の「本論」(n. 12 以下)の目指す所だったのである。しかし、この問題については、稿を改めて論じなければならない。

註

- (1) 代表的な箇所としては、*De Trinitate* X. ix. 12.
- (2) S. M. Zarb, *Chronologia Operum Sancti Augustini. Angelicum* 10, 1933. p. 500; *Aug. Retr.* II. xli. による。また Al. Goldbacher は、著作年代を 413~414 年の間としている。CSEL. 58. pp. 39f.
- (3) K. Heussi, *Compendium der Kirchengeschichte.* 1979¹⁵, Tübingen, S. 134f.; A. Adam, *Lehrbuch der Dogmengeschichte*, Bd. I. 1970², Gütersloh. S. 321 ff.
- (4) W. J. Sparrow-Simpson, *The Letters of Augustine*, 1919, London, p. 267.
- (5) *Epist. 147.* 1. Cum enim petuisses, ut de invisibili deo, utrum per oculos corporeos possit videri, prolixè aliquid copioseque ad te scriberem.....
- (6) *ibid.* 5.
- (7) *Epist. 147* のテキストとしては、Al. Goldbacher 編纂のアウグスティヌス『書簡集』*S. Aurelii Augustini Operum Sectio II. S. Augustini Epistulae* (CSEL. vol. 44) を用いた。
- (8) *Epist. 147.* 3 : *ibid.* I. 6.
- (9) *ibid.* 4.
- (10) *ibid.* II. 7.
- (11) cf. *ibid.* 3.
- (12) *loc. cit.*
- (13) *ibid.* 4.
- (14) *Epist. 147* では 'intellegere' という語が 'sentire' との対比において明確に用いられている箇所はないが、*Conf. XII. v. 5.* においては、我々が 'videre mente' の実例として述べた「生命」*vita* が「可知的形相」*intellegibilis forma* と呼ばれ、*intellegere* の対象とされており、また *De Trin. X. ix. 12.*

においては、認識の区分が明確に *sentire, intellegere, credere* という用語をもって述べられ、*intellegere* の実例として、我々がここで挙げた「意志」*voluntas* の場合が挙げられている。(つまり、私が、何かを意志していることの認識が *intellegere* と呼ばれている。) また、註 (45) 参照。

- (15) *Epist. 147. 3. sic... vides haec omnia, ut in te videas, apud te habeas ac sine ullis figurarum liniamentis colorumque nitoribus tanto clarius et certius quanto simplicius interiusque conspicias.*
ibid. 4. et quidquid aliud mente conspicias atque ita esse non tantum credendo sed plane videndo non dubitas...
- (16) *ibid. 5. ibid. I. 6.*
- (17) *ibid. 5.*
- (18) *ibid. II. 9.*
- (19) *Epist. 147* で *sentire, intellegere* という標題が用いられていないのは、*sentire, intellegere* の対象が *praesentia* であるからであろう。つまり、アウグスティヌスは、*sentire, intellegere* 双方の場合に *videre* という語を用いることによって、両者の対象の共通性を表示しようとしたのである。
- (20) *Epist. 147. I. 6. putant ipsum, quod dicimus credere, cum res vera creditur, hoc solum esse mente contueri. ...haec enim etiam corporaliter facta sunt et videri per corpus, si tunc adessemus, utique potuerunt, nunc autem non adsunt, sicut adest ista lux, quae oculis cernitur, aut voluntas, quae nunc aliquid volumus, quae mente conspicitur.*
- (21) 従って、Aug. がここで念頭に置いているのは、*Epist. 120* で論駁している Consentius のような人かも知れない。コンセンティウスは、三位一体の問題の *intellegere* を拒み、それをただ信仰のみによって把持しようとした。
- (22) 以上三つの問題の第一と第二に関しては次章で、また第三に関しては第 VIII 章で、解答が与えられる。
- (23) *Epist. 147. I. 6. sed quia haec distinctio falsa non est, profecto illa praestructio minus habebat, quod inter credere et aliquid praesens mente conspicere, ne omni modo unum atque idem putaretur, parum clara fuerat elocutione discretum.*
- (24) *ibid. II. 7. Quid ergo dicemus? num satis est, ut inter videre et credere hoc distare dicimus, quia praesentia videntur, creditur absentia?*
- (25) *loc. cit. si quis vero mihi indicet voluntatem suam, cujus os et vox mihi praesens est, tamen, quia ipsa voluntas, quam mihi indicat, latet sensum*

corporis et animi mei, credo, non video,

- (26) *ibid.* V. 12. でアウグスティヌスは、*I Joh.* 3, 2 に関連して次のように述べている。*Scimus, inquit (Johannes), quia, cum apparuerit, similes erimus, quoniam videbimus eum, sicuti est. ecce scire se dixit quod nondum factum fuerat nec videndo sed credendo cognoverat.*
- (27) *ibid.* II. 7. ...aut, si eum mentire existimo, non credo, etsi forte, ut dixit, ita est.
- (28) *ibid.* 4.
- (29) *ibid.* III. 8. in his autem, quod credimus, aliis testibus movemur ad fidem, cum earum rerum, quas nec vidisse nos recolimus nec videmus, dantur signa vel in vocibus vel in litteris vel in quibusque documentis, quibus visis non visa credantur.
- (30) アウグスティヌスは、この「理解」*intelligere*をも、精神 *mens* の働きと考えている。*ibid.* III. 9. *videt autem animo, quicquid figuris litterarum sonisve significari intellexit; videt ipsam fidem suam...* (ここでの *videre animo* は、*sentire, credere* との対比で用いられているのだから、明らかに *videre mente* の意味である。註(43) 参照)。所で U. Duchrow は *Sprachverständnis und biblisches Hören bei Augustin*, 1965, Tübingen, S. 106f において、*Jes.* 7, 9 (LXX) の *intellege, ut credas, (verbum meum); crede, ut intellegas, (verbum dei)* の解釈に関連して、「この語を、自然神学の意味における *praeambula fidei* と看做すべきではない」と述べ、この2つの *intelligere* の内の前者を「説教のことばの理解」と考えるべきであると述べている。しかし Aug. は、——今引用された箇所から明らかな如く——この「ことばの理解」にも *mens* が関与していることを承認しているのである。従って、*praeambula fidei* 云々の問題は、「ことばの理解」と「神認識」とのそれぞれにおける *mens* の働きについて明らかにすることなしには、論じられないであろう。
- (31) *ibid.* II. 7. *creduntur ergo illa, quae absunt a sensibus nostris, si videtur idoneum, quod eis (i. e. sensibus) testimonium perhibetur.*
- (32) *ibid.* IV. 11.
- (33) *loc. cit.*
- (34) *ibid.* II. 7. *nec, quia dixi ea credi, quae absunt a sensibus nostris, sic accipiat, ut inter illa (sc. ea quae creduntur) deputentur, quae aliquando vidimus..... neque enim inter credita sed inter visa deputantur.*

- (35) Aug. は、ここに述べられた「自己の魂の動き」についての記憶について *Conf.* X. xiii. 20 で論じている。
- (36) 後述の如く(第20～21節)、この *videre* は *videre mente* である。
- (37) n. 7 から n. 8 にかけて、Aug. はこれら2種類の記憶の必要性を意識した慎重なことば使いをしている。
Epist. 147. II. 7. nec, quia dixi ea credi, quae absunt a sensibus nostris, sic accipiatur, ut inter illa deputentur, quae *aliquando vidimus et nos vidisse retinemus* certique sumus, quamvis tunc non praesto sint, cum recoluntur a nobis; ... quia *nos vidisse sine dubio recordamur et scimus.*
ibid. III. 8. ... cum earum rerum, quas *nec vidisse nos recolimus nec videmus*, dantur signa. (イタリック筆者)
- (38) かかる事態を表で示せば次のようになる。

	<i>videre</i>	<i>credere</i>
認識される内容の在る場	自己の内に	自己の内に
<i>videre videre</i> の在る場	自己の内に	他者の内に

- (39) *Epist.* 147. III. 8. Constat igitur nostra scientia ex visis rebus et creditis.
- (40) 本稿第5節参照。
- (41) *Epist.* 147. III. 8. porro si scire non incongruenter dicimur etiam illud, quod certissimum credimus, hinc factum est, ut etiam recte credita, etsi non adsint sensibus nostris, *videre mente* dicamur.
- (42) *loc. cit.* scientia quippe menti tribuitur, sive per corporis sensus sive ipsum animum aliquid perceptum cognitumque retineat, et fides ipsa mente utique videtur, quamvis hoc fide creditur, quod non videtur. U. Duchrow は、a. a. O. S. 110 でこのテキストの解釈を行っているが、筆者は Duchrow とは解釈を異にする。
- (43) n. 9 では '*videre mente*' が '*videre animo*' と、また n. 7 では '*mens*' が '*animi sensus*' と言い換えられている。cf. 註(30)
- (44) *mens* のこの役割を表で示せば【別表】のようになる。
- (45) *mens* の働きのかかる浸透については、Aug. は既に初期から認識していたようである。Aug. は *Epist.* 13 (386～7年)において、*mens* の働きとしての *intellegere* を、(1)物体との関係において行われるもの、(2)純粹に自己の内において行われるもの、の2つに区分している。

Epist. 13. 4. Hoc si dices, veniat in mentem illud, quod intellegere appellamus, duobus modis in nobis fieri: aut ipsa per se mente atque ratione intrinsecus, ut cum intellegimus esse ipsum intellectum; aut admonitione a sensibus,, cum intellegimus esse corpus. in quibus duobus generibus illud primum per nos, id est de eo, quod apud nos est, deum consulendo; hoc autem secundum de eo quod a corpore sensuque nuntiatur, nihilo minus deum consulendo intellegimus.

【別表】

